

◆巻頭言

ヨイトマケの唄と作業療法と・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 能登 真一 573

◆総説

作業中心・作業焦点・作業基盤実践能力を評価する尺度の現状と課題

—スコーピングレビュー—・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 河野 崇・他 575

◆原著論文

急性期脳梗塞患者における運転関連認知機能検査の因子構造の解析・・・・・・・・ 井上 信悟・他 584

回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した脳卒中患者における主観的健康感と社会的活動性の関連

—包括的アンケート調査による検討—・・・・・・・・・・・・・・・・ 神尾 昭宏・他 594

運動機能障害を有する地域在住パーキンソン病患者のIADL の実施頻度および作業機能障害の特徴

—予備的研究—・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤 飛友悟・他・他 602

人間作業モデルの実践経験が作業療法士の独自性の認識に与える影響

—SCAT を援用した質的研究—・・・・・・・・・・・・・・・・ 神保 匡良・他 610

農福連携の支援評価（重要度—課題度）とOT 役割認知の関連

—探索的横断研究—・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 中井 秀昭・他 623

作業療法士における失行に対する観察技能の実態

—Web アンケート調査—・・・・・・・・・・・・・・・・ 山田 麻和・他 632

◆実践報告

認知機能低下を伴う橈骨遠位端骨折後高齢者への多職種協働による自主練習支援の実践報告

—ADOC-DRF と動画教材の併用による行動変容支援の可能性—・・・・・・・・ 河野 真太郎・他 641

記憶障害と発動性低下を併発した症例に対する外的補助手段の段階的活用とADL 拡大

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 木村 愛・他 649

臨床実習教育に向けた生成AI による挑戦—能力バランス支援システムの開発と実行可能性

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 吉田 一平・他 658

精神科デイケアにおける統合失調症者に対する作業機能障害に着目した就労支援

—事例報告—・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 鈴木 将武・他 666

手指切断を含む複合組織損傷術後に機能訓練と段階的な目標指向型訓練がADL の改善に有効であった事例

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤 保・他 675

MTDLP に基づいたセルフモニタリングシートの活用による活動量コントロールスキルの獲得支援

—精神科訪問看護における作業療法士の実践—・・・・・・・・ 佐藤 祐樹・他 684

クライアント中心目標設定尺度（C-COGS）日本語版の翻訳と文化的適応

—国際的な患者報告式アウトカム尺度翻訳ガイドラインに基づくプロセス— 金田 明莉・他 692

軽度半側空間無視例の運転中止への適応過程

—ARMT-J とCAOD を活用した移動移行支援の一事例— 堀川 周・他 700

急性期脳卒中後の上肢運動麻痺に対してTransfer package を中心とした週1 回の外来作業療法の取り組み

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小松 真直・他 708

家族を触媒とした作業療法と子どもの参加

—こどもの参加質問紙と目標達成スケールを用いた単一事例報告— 石井 ハル・他 715

◆短報

発達領域の作業療法の専門性と役割は何か？

—経験豊富な作業療法士における省察過程の質的分析—・・・・・・・・・・ 濱田 匠・他 724

編集後記

▶本号に掲載された論文・報告を通読し、作業療法の実践においてクライアント中心の姿勢が着実に根付いてきていることを実感いたしました。クライアントの価値観や望む暮らしに丁寧に耳を傾け、その人にとって意味のある作業を支援の中心に据える視点は、作業療法の専門性を支える基盤といえます。同時に、そうした実践は作業療法士単独で完結するものではなく、医療・保健・福祉・教育等の他職種との連携を通じて、より具体的な支援へと結実していることも印象的でした。本号が、読者の皆様にとって日々の臨床を振り返る機会となれば幸いです。末筆ながら、私自身もクライアント中心の実践と多職種連携のさらなる充実に向けて、精進を重ねてまいります。

(S・K)

▶機関誌「作業療法」がオープンアクセス（OA）化し1年が経過した。OA移行後に投稿された論文はOA論文として公開されるが、ここ数号で掲載数が増えており、本号は18論文中13論文がOA論文である。OA論文は、ライセンス条件に従う限り、論文内の図表やイラストを無償かつ即座に二次利用でき、大規模なメタ解析やAIを活用したエビデンス集約などにおいて法的にスムーズに活用できる。つまり、我々の臨床や研究の知が検索、引用されやすくなり、社会から作業療法の成果へのアクセスが向上することが見込まれる。その恩恵を実感できるのはまだ先かと思われるが、「作業療法」のなかにライセンスのマークが増えるたびに、そんな未来への期待が膨らんでいく気がする。

(T・M)